

## はじめに

本書はこれから日本語教育を学ぶ人、興味がある人(例えば大学の日本語教育専攻・副専攻の1年生、ボランティアで外国人に日本語を教えてみたいと思っている人など)を対象として、日本語教育の基礎の基礎(超基礎!)を知ってもらうために刊行したものです。本書の特色は「日本語教育を知る」ことだけで終わるのではなく、この15章を通して(例えば半期15回の授業)「模擬授業をやってみる」ところまで進める点にあります。

日本語教育は、非常にやりがいのある仕事です。ただ、学校の先生と違って、高校生までに日本語教師という仕事に触れる機会はほとんどありません。ですから、まず第一に、「日本語教師という仕事を知ってほしい」ということがあります。そして、第二に「日本語教育という仕事の面白さを「やってみて」実感してほしい」という思いがあるのです。

実際には教壇に立つまでに身につけなければいけない知識や技術は、山ほどあります。もちろん、日本語教師になるために必要な知識を地道に積み上げていくことはとても大切なことなのですが、「教える面白さ」にたどり着く前に、日本語教師への道をあきらめてしまう人がいることはとても残念に思います。

授業は“ライブ”です。そして、日本語教育(特に初級)は、(外国人の)学習者に「あまり言葉が通じない」ということを前提に行われますので、オーバーアクションで、ジェスチャーで、表情で、全身を使って伝えることが求められます。ですから日本語教育を知ってもらうために、「伝えることの面白さ」をできるだけ早く体験してみてほしいという願いを込めて本書を作成しました。

本書は日本語教育の入門書でありながら、文法などに代表される言語の構造に関する内容には、ほとんど触れていません。もちろん、文法などについておろそかにしてよいと考えているわけではありません。ただ、「まずは日本語教育を知り、とにかく体験してほしい!」という強い願いがあり、このような内容としました。

本書執筆の7人は、私も含めて全員が日本語教師です。そして、日本語教育が持つ「伝えることの面白さ」を経験して、その魅力のとりこになった人間で

もあります。日本語教師は言語を扱う仕事ですが、まずは「伝える人(教師)」と「伝えられる人(学習者)」という人間関係の上に成り立っているのです。

「まずは日本語を教えることを体験してみよう！」これが著者一同からのメッセージです。あなたが日本語を教えることの楽しさに気づき、私たちの仲間になってくれることを強く願っています。

2019年5月

編著者 森篤嗣

# 目次

本書の使い方 … 8

## 第1章 日本語教育とは … 12

1. 日本語教育は、国語教育と英語教育どちらに近い？ …… 12
  2. 日本語教育と国語教育の共通点と相違点 …… 13
  3. 日本語教育と英語教育の共通点と相違点 …… 14
  4. まとめ …… 17
- コラム 01 日本語教師に向いている人 …… 18

## 第2章 日本語学習者とは … 20

1. 海外における日本語学習者 …… 20
  2. 日本国内における日本語学習者 …… 22
  3. 留学生 …… 23
  4. 外国人労働者 …… 24
  5. 日本語指導が必要な児童・生徒 …… 26
  6. まとめ …… 27
- コラム 02 外国人看護・介護人材のための日本語教育 …… 29

## 第3章 日本語教師とは … 30

1. 日本人なら誰でも日本語を教えられる？ …… 30
  2. 日本語教師になるためには？ …… 32
  3. 日本語教育能力検定試験 …… 33
  4. 日本語教師の職場と雇用 …… 34
  5. まとめ …… 36
- コラム 03 日本語教師は英語がペラペラ？ …… 38

## 第4章 日本語能力の測定と試験 … 39

1. 「ペラペラ」とはどういう状態か？ …… 39
2. 能力の測定に必要な「妥当性」と「信頼性」 …… 40
3. 日本語能力試験（JLPT）と日本留学試験（EJU）の概要 …… 40
4. 日本語能力試験の問題を分析してみよう …… 41

5. まとめ	46
コラム 04 日本語教育文法	47
<b>第5章</b> コースをデザインしよう … 48	
1. あなたならどんなコースを作る？	48
2. 学習者のことを知ろう	48
3. 教える機関について知ろう	49
4. コースの目標と評価方法(テスト)を決めよう	50
5. 教材について考えよう	52
6. 何をどの順番で教えるかを考えよう	53
7. まとめ	56
コラム 05 日本語学習者の多様性と教師の役割	58
<b>第6章</b> さまざまな教授法 … 59	
1. さまざまな外国語教授法	59
2. 直接法と間接法	62
3. 教授法の最近の傾向	63
4. まとめ	65
コラム 06 先生が話さない教室	66
<b>第7章</b> 学習レベルと教材・教具 … 67	
1. いろいろな教材・教具	67
2. 日本語教育のレベル分けと教材	68
3. 初級総合教科書の内容と構成	71
4. 教材分析	74
5. まとめ	75
コラム 07 「レベル」判断の難しさ	77
<b>第8章</b> 学習者の目から日本語を見てみよう … 78	
1. 日本語学習者の誤用	78
2. 星がムカムカ光っている — オノマトペ	79

3. ペンを鉛筆に替わる —自動詞・他動詞	80
4. 私は明日、学校にきない —動詞の活用	81
5. まとめ	84
コラム 08 あなたの「日本語教育」が目指すものとは	85
<b>第9章 ティーチャートークとやさしい日本語</b>	86
1. 日本語を日本語で教えるための工夫	86
2. ティーチャートークの特徴	87
3. 教室談話の構造	88
4. フィードバック	89
5. ティーチャートークを社会で活かす—「やさしい日本語」	90
6. 「やさしい日本語」の形	92
7. まとめ	93
コラム 09 やさしい日本語は不自然な日本語?	95
<b>第10章 教室でのやりとりと学習者へのフィードバック</b>	96
1. 教室における教師の役割は?	96
2. 教室での教師と学習者のやりとり	97
3. 学習者同士のインターアクション	98
4. 学習者の誤用に対する教師の対応とその重要性	99
5. 訂正フィードバックに対する学習者の反応	102
6. まとめ	103
コラム 10 私が日本語教師を目指すまで	104
<b>第11章 授業の流れを考えてみよう</b>	105
1. 日本語の授業と教案作成	105
2. 教案には何を書く?	106
3. 授業の大きな流れを考えよう	107
4. 「文型ベース」の授業の流れと展開	107
5. 「タスクベース」の授業の流れと展開	108
6. どんな学習者に向いているか	111
7. まとめ	112
コラム 11 イラスト教材をたくさん使う先生はいい先生なのか?	114

章 12 章〈実習①〉日本語授業の見学 … 115	
1. 授業見学の前に ……………	115
2. 授業観察のポイント ……………	116
3. 授業観察をしてみよう ……………	118
4. まとめ ……………	119
コラム 12 マイノリティ経験の重要性 ……………	120
第 13 章〈実習②〉模擬授業の準備 … 121	
1. 授業はお芝居に似ている?! ……………	121
2. 授業を設計しよう ……………	122
3. ロールプレイを活用しよう ……………	123
4. 授業の流れを考えよう ……………	125
5. まとめ ……………	127
コラム 13 信頼関係（ラポール）形成の重要性 ……………	128
第 14 章〈実習③〉模擬授業の実践とふり返し … 129	
1. 実践に挑戦しよう ……………	129
2. ふり返りの意義 ……………	131
3. 協働としてのふり返し ……………	132
4. ふり返ってみよう ……………	133
5. まとめ ……………	134
コラム 14 日本語教育的マインドの活用 ……………	135
第 15 章 これからの日本語教育 … 136	
1. 日本語教育の「教育」とは何か ……………	136
2. 「教える人」から「育つことの支援者」へ ……………	137
3. 教師の役割と教室の雰囲気 ……………	140
4. これからの教師に求められるもの ……………	141
5. まとめ ……………	143
コラム 15 日本語教師のスキルのさらなる活用の可能性 ……………	144

用語集 … 145

著者紹介 … 156

おわりに … 158

## 本書の使い方

### 本書の対象者

本書は、以下の人が対象です。

- これから日本語教育を学ぶ人
- 日本語教育に興味がある人
- ボランティアで外国人に日本語を教えてみたい人
- 海外留学で日本語の Teaching Assistant (TA) やランゲージエクスチェンジをする機会のある人

また、主に大学の授業では、

- 日本語教育に関する初めての授業(「日本語教育概論」など)を受講する日本語教育主専攻・副専攻の大学1年生

を対象者として想定しています。

ただし、一般的な概説書とは異なり、文法など言語の構造に関する内容は独立しては取り上げず、模擬授業を含めた「教育」の側面を強く志向したテキストとなっていますので、

- 大学2年生の教育実習系の授業(「日本語教育実習の基礎」など)

にも使っていただけます。

### 各章の内容

本書で学ぶ内容はだまかに4つのセクション・段階に分かれています。

- |            |  |
|------------|--|
| ■第1章～第4章   | 日本語教育そのものや、日本語教師、日本語学習者、試験など日本語教育に関連する基礎的な知識を学ぶ。 |
| ■第5章～第11章  | 具体的な授業の進め方、教案の書き方、教材についてなど日本語教育の技術を学ぶ。           |
| ■第12章～第14章 | <実習>日本語の授業を見学や模擬授業を通して実際に体験してみる。                 |
| ■第15章      | これからの日本語教育と日本語教師としてのキャリアについて考える。                 |

# 第1章 日本語教育とは

## この章のポイント！

日本語教育とは「外国人に日本語を教えること」に関する分野です。とはいえ、実は皆さんは日本語教育を受けたことも、見学したこともないと思います。そこでこの章では、皆さん自身が小学校・中学校・高等学校で経験した言語教育(国語教育や英語教育)と比較しながら、「言語を学ぶこと」をふり返ってもらい、「言語を教えること」を知るきっかけをつかんでほしいと思います。

### ☑ キーワード

国語教育、英語教育、目標言語、教授言語、教育の目的、教師の立場

## 1. 日本語教育は、国語教育と英語教育どちらに近い？

まず、考えてみてほしいことがあります。それは外国人に日本語を教えるという日本語教育は、皆さんが学校教育で経験してきた教科で言えば、国語(母語話者に対する母国語(公用語))と英語、どちらに近いでしょうか？

教師と生徒の関係、目標言語(学習する言語)や教授言語(教師が教えるときに使う言語)、教育の目的の違いなどを中心に考えてみましょう。



### 課題 1

日本語教育は、国語と英語のどちらに近いと思いますか？ まず、自分自分でワークシートを埋めてから、目標言語、教授言語、教育の目的などの観点について、周りの人やグループで話し合ってみましょう。

→ワークシートは「超基礎 website」よりダウンロード

教育とは何か」を考え始めることが可能なのです。日本語教育とは、日本語を母語としない人(主に外国人)に対して、日本国内外で日本語を教えることを指します。しかし、日本語がまったくできない人に教える場合と、少しできる人に教える場合は違いますし、日本国内で教える場合と海外で教える場合でもやはり違います。日本語教育は、学校教育に比べて目的や方法にかなり大きな差があるといえます。

ただ、それでも教師として「良い言語教育とは何か」を考えることで、日々の授業を改善していけるという点は共通しています。今日は授業の一環で行いましたが、さまざまな場面でいろいろな人と「良い言語教育」について話し合う機会を持つようにしてください。それでは、これから本書を通して日本語教育の理解を深め、その魅力を体感していきましょう。



### もっと知りたい人へ

- クラッシュェン, S.D.・テレル, T.D. (著), 藤森和子(訳)『ナチュラル・アプローチのすすめ』(1986 / 大修館書店)
- 高見沢孟『新しい外国語教授法と日本語教育 (NAFL 選書)』(1989 / アルク)
- 姫野昌子・小林幸江・金子比呂子・小宮千鶴子・村田年『ここからはじまる日本語教育』(1998 / ひつじ書房)
- リヴァーズ, M.W.(著), 天満美智子・田近裕子(訳)『外国語学習のスキル—その教え方 第2版』(1987 / 研究社)

#### 資料：

「中学校学習指導要領(平成 29 年告示)解説 国語編」文部科学省

[http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_\\_icsFiles/afieldfile/2018/05/07/1387018\\_2\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2018/05/07/1387018_2_1.pdf) (2019 年 3 月 8 日閲覧)

「中学校学習指導要領(平成 29 年告示)解説 外国語編」文部科学省

[http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_\\_icsFiles/afieldfile/2018/05/07/1387018\\_10\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2018/05/07/1387018_10_1.pdf) (2019 年 3 月 8 日閲覧)

## 日本語教師に向いている人

日本語教師に向いている人、それは「声の大きい人」です。「えっ?!」と思われたかもしれませんが、冗談ではありません。日本語教師に限りませんが、先生とは「人前で話す仕事」であり、そのプロです。まして、日本語教師は言語教師なので、その発音の明瞭さもプロとしての技能の一つです。「声が小さくて聞こえない」なんていうのでは困るのです。もちろん、「声さえ大きければそれでいい」というわけではありませんが…。

一方で、教師はある種「演じる」という側面もあります。私の知り合いの日本語教師で、普段はものすごくシャイで、人前で話すどころか、知らない人と話すのは極力避けるという人がいます。しかも、あまりにのんびりしていて「本当に日本語の授業ができるのかな?」と思うほどなのです。

しかし、そんな彼女も、日本語教師として教壇に立ったときには、まるで人が変わったようにハキハキ話し、テキパキ動きます。そのあまりの「変わり身」に普段の姿とのギャップがすごいのです。

もちろん、普段の姿と教壇での振る舞いがほとんど変わらないという人もいます。しかし、教師としてのトレーニングによって、冒頭での声の出し方も含めて「人前で話す仕事」を「演じる」ことができるようになるのであれば、結果として教師に向いた人であるといつて良いと思います。日本語教師に興味がある人でも、「私は人前に出るような性格じゃないから…」と言って早々にあきらめてしまう人もいますが、性格だけで日本語教師をあきらめるのは早すぎる!と思う次第です。教師にとって本当に必要な資質はほかにもたくさんあるのです。



# 第2章 日本語学習者とは

## この章のポイント！

誰が、どこで、なぜ日本語を勉強しているのでしょうか。この章では、日本語を学習している人たちがどのような目的をもって、どういった機関で日本語を学んでいるのか、その多様性を理解することを目指します。国内外の多様な日本語学習者について、それぞれの学習者が必要とする日本語教育とはどのようなものかについて考えてみたいと思います。

### ☑ キーワード

JFL、JSL、学習動機、ニーズ、留学生、外国人労働者

## 1. 海外における日本語学習者

言語教育・研究の場では、生まれて最初に習得する言語を第一言語(母語)、母語以外に習得する言語を第二言語と呼んでいます。何か国語も話せる人の場合には、第三言語、第四言語が存在しますが、それらも第二言語の中に含まれています。第二言語としての日本語教育はさらに、海外で外国語として日本語を学ぶ JFL (Japanese as a Foreign Language) と日本国内で日本語を学ぶ JSL (Japanese as a Second Language) に分けられます。では、JFL 環境と JSL 環境では、日本語学習においてどのような違いがあるのでしょうか。



### 課題 1

JFL と JSL の違いについて、ワークシート①を使って(1)学習者、(2)教師、(3)日本語学習の必要性、(4)日本語の学習機会という観点から考え、グループで話し合ってみましょう。

➔ワークシート①は「超基礎 website」よりダウンロード

# 第3章 日本語教師とは

## この章のポイント！

これまで読んできた中で、「日本語教師」と「国語教師」では教える対象も教える内容も異なる職業であることが理解できたのではないのでしょうか。それを踏まえた上で、この章では、「日本語教師」とはどのような人を指すのか、教える上で求められる資質や能力、日本語教師になるための資格や職場、日本語教師という仕事の将来性などについて見ていきたいと思います。

### ☑ キーワード

日本語教師、母語話者教師、非母語話者教師、資格、日本語教育能力検定試験

## 1. 日本人なら誰でも日本語を教えられる？

日本人なら誰でも日本語を教えられるのではないか。皆さんはそう考えたことはないのでしょうか。では、ここで質問です。「おいしいから食べて」「あっち行って」「一緒に遊んで」という表現に共通する「～て」という形には、どのようなルールがあるのでしょうか。「食べる」は「食べて」になるのに、どうして「行く」は「行て」に、「遊ぶ」は「遊んで」になるのか説明できますか。



母語話者の場合、生まれたときから生活の中で日本語に触れ、「自然に」日常会話を身につけてきており、そのルールを意識せずに使用しているところがあります。しかし、日本語学習者の場合は、ルールを理解しながら学んでいくため、日本語教師は、「日本語」のルールを体系的知識として再整理、理解し、教えていくことが求められます。その知識や教えるスキルがなければ、たとえ母語話者であっても日本語を教えるというのは簡単にできる仕事ではありません。

# 第4章 日本語能力の測定と試験

## この章のポイント！

日本語教育の最終的な目標は「日本語が上達すること」です。しかし、「どこまでの上達を目標とするか」や「どれだけでできれば上達したといえるか」は人それぞれです。また、日本語の上達を支える日本語能力には、読む・書く・聞く・話す・言語知識などさまざまな側面があり、その測定は極めて困難です。試験はあくまで多面的な日本語能力のある一部分を測定するものに過ぎませんが、日本語教育の一つの目標であり目安です。この章では、日本語能力を測定する代表的な試験について見ていきたいと思います。

### ☑ キーワード

日本語能力試験、日本留学試験、妥当性、信頼性、読解、聴解

## 1. 「ペラペラ」とはどういう状態か？

まず、考えてみてほしいことは、「日本語がペラペラ」というのはどういう状態かということです。日本人が英語の能力について話すときにも、「アメリカに留学してたんですか。じゃあ、英語がペラペラなんですね」といった話が出てくることがあります。



### 課題 1

皆さんが考える「英語がペラペラ」とは、どのような状態ですか。また、日本語学習者がどれだけのことができると「日本語がペラペラ」と解釈しますか。例を挙げながら周りの人やグループで話し合ってみましょう。

# 第5章 コースをデザインしよう

## この章のポイント！

ここまでで、日本語教師がどういうものか、イメージができたでしょうか。この章からは、具体的に教えることを想定して進めていきます。まず、「コースデザイン」について学びます。日本語の授業は1回で終わり、ということはありません。1週間、半年、1年など、ある一定の期間にわたって教える場合、教師は学習者が求めていることを知り、何をどの順番でどのように教えるかを考えなければなりません。これを「コースデザイン」といいます。この章ではコースデザインの段階で考えなければならないこと、注意しなければならないことなどについて考えます。

### ☑ キーワード

コースデザイン、コースの目標、評価方法(テスト)、ニーズ、レディネス、シラバス

## 1. あなたならどんなコースを作る？

「コースデザイン」というのは、簡単に言うと、ある一定期間の授業計画のことです。1週間、半年、1年など期間はさまざまですが、コースの到達目標を決め、その到達目標に向けてどのように授業を組み立てていくかを考えます。日本語教育機関で教える内容は日本国内の小学校・中学校のように国によって決められているわけではありません。そのため、日本語教師にはコースの中で何を教え、何を教えないかを決め、コースを設計する力が求められるのです。では、コースを設計するとき、どんなことに注意しなければならないかを考えていきましょう。

## 2. 学習者のことを知ろう

まず、教える相手である学習者のことを知らなければなりません。クラスの学習者の人数、出身地の構成などのほかに、学習者が何をどのように学びたい

# 第6章 さまざまな教授法

## この章のポイント！

この章では、実際に日本語をどうやって教えるかを考えていくために、まず、これまでに提唱されてきた「外国語の教え方」をいくつか概観します。また、外国語を学ぶときには、自分の母語などで説明を受けながら学ぶか、それとも、できるだけ目標言語のみをクラスの中で使って学ぶ方がよいのかということについて、その長短を考えます。さまざまな教授法とその背景にある言語学習観に触れ、自分はどのように日本語を教えていきたいか、考えてみてください。

### キーワード

言語学習観、直接法、媒介語、オーディオ・リンガル法、  
コミュニカティブ・アプローチ

## 1. さまざまな外国語教授法

「教授法」とは、簡単にいえば「教え方」のことです。「敬語の教授法」といった具体的な教える方法や、「絵を使った教授法」といった技術面のことを指すこともあります。本章では、これまで提唱されてきた言語教育の理念と、その理念に基づく指導方法のことを「教授法」と呼ぶことにします。それぞれの「教授法」の背景には、ことばとは何か、それはどのように学ばれるのかという言語学習観が存在します。

まず、皆さんの経験をもとに具体的に考えてみましょう。



### 課題 1

皆さんはこれまでどのような教え方で、外国語の授業を受けたことがありますか。楽しかった授業、つらかった授業、変わった方法で学んだ授業などを思い出し、周りの人と自由に話し合ってみましょう。

# 第7章 学習レベルと教材・教具

## この章のポイント！

日本語を教えるとき、いろいろな教材や教具を使います。現在は、レベルや目的に合わせていろいろな教材が市販されています。この章では、まず「レベル」をどのようにとらえればよいかを知るとともに、どのような教材があるのか、教材の構成はどうなっているのかを具体的に見ていきましょう。また、自分が教師になって教えるとき、使用する教材をどのように選べばよいか、考えてみましょう。

### ☑ キーワード

初級、中級、上級、総合教科書、主教材、副教材、易から難へ、教材分析

## 1. いろいろな教材・教具

授業では、さまざまな教材や教具を使います。教材とは、教えるための材料のことで、「このテーマは教材には向かない」というように教育の内容自体を指すこともあります。本章では、教科書のような書籍や、読解で使う新聞の記事、DVD・音声データなどの視聴覚資料のように、授業で扱うコンテンツが載っているもののことを教材と呼ぶことにします。一方、授業を進めるためには、教材のほかにもさまざまな道具が使われます。黒板や教室に貼ってある地図、最近、普及してきたタブレットなども広い意味では教具といえますが、本章では特に、授業を効果的に進めるために教師が準備して使用する「小道具」のことを教具と呼ぶことにします。



### 課題 1

これまで受けてきた英語やその他の外国語の授業では、どのような教材や教具が使われていましたか。できるだけたくさん思い出して、周りの人と話し合ってみましょう。

# 第8章

# 学習者の目から 日本語を見てみよう

## この章のポイント！

日本語母語話者の皆さんにとって、「日本語」は物心がついた頃から周り  
にある、当たり前存在です。それがどんなものなのか改めて考えたこと  
がない人がほとんどでしょう。日本語を客観的に言語として意識するには、  
日本語を外国語として学習する日本語学習者の誤用が良いヒントになりま  
す。この章では学習者の誤用を手がかりにして、非母語話者にとっての日  
本語の語彙や文法を考えてみます。

### ☑ キーワード

学習者、誤用、無意識の知識、オノマトペ、自動詞、他動詞、活用型、  
動詞のグループ、Ⅰグループ、Ⅱグループ、Ⅲグループ

## 1. 日本語学習者の誤用

まずは、日本語学習者の誤用(間違った使用)を見てみましょう。



### 課題 1

次の(1)から(3)は日本語学習者の誤用です。おかしい部分を指摘し、どの  
ように直すか考えてみましょう。また、どうしておかしいか、その理由を周  
りの人やグループで話し合ってみましょう。

- (1) 星がムカムカ光っている。
- (2) ペンを鉛筆に替わる。
- (3) 私は明日、学校にきない。

どのように直すかはわかっても、おかしい理由を説明するのは難しいのでは  
ないでしょうか。使い方(直し方)が瞬時にわかり、それがほかの人と共通して

# 第9章 ティーチャートークとやさしい日本語

## この章のポイント！

日本語教師は、まだあまり日本語が流暢でない初級レベルの学習者とも日本語を使って上手にコミュニケーションを取っています。では、日本語教師はどんな方法を使っているのでしょうか。また、教室ではどのように教師と学習者のやりとりが行われているのでしょうか。この章では、教師の発話の工夫である「ティーチャートーク」、教室内のやりとりと「フィードバック」について紹介します。そして、ティーチャートークと似た特徴を持つ「やさしい日本語」についても紹介し、多文化共生社会の日本で日本語教育に関する知識がどのように活用できるかについて、考えていきたいと思います。

### ☑ キーワード

ティーチャートーク、直接法、教室談話、IRF、フィードバック、やさしい日本語

## 1. 日本語を日本語で教えるための工夫

第6章で学んだように、日本国内で教える日本語教師には、初級レベルから学習者の目標言語(=日本語)を使って教える「直接法」という方法、つまり、最初から日本語で日本語を教えている人が多くいます。

もちろん、学習者は日本語を知らないわけですから、直接法で教えるために教師は学習者のレベルに合わせて、語彙や文法のコントロール、話すスピードの調整、学習者が理解したかどうかの確認など、さまざまな工夫をしています。この工夫された話し方のことを「ティーチャートーク」といいます。

# 第10章 教室でのやりとりと 学習者へのフィードバック

## この章のポイント！

日本語学習者の多くは日本語の上達を一つの目標として学んでいることでしょう。では、学習者が日本語を効果的に習得するために、教師はどんな支援ができるのでしょうか。

ここまでで見てきたように、授業前に教案作成や教材分析をしっかり行うことは、授業の質を高め、学習者の習得に貢献する可能性があるものです。ただし、それだけではありません。実際の授業中に教師が学習者とのどのようなやりとりを行うのかということが、学習者の習得に貢献することが多くの研究によってわかってきました。この章では、授業における教師のパフォーマンスについて、学習者とのやりとりという観点から考えていきたいと思います。

### ☑ キーワード

教師と学習者のやりとり、インターアクション、意味交渉、訂正フィードバック、アップテイク

## 1. 教室における教師の役割は？

第9章ではティーチャートークについて学び、日本語教師がさまざまな工夫をしているのを見てきました。本章では、授業中の教師と学習者のやりとりをもう少し詳しく見ていきます。



### 課題 1

皆さんは外国語を参考書や教材、オンラインツールなどを用いて一人で学ぶスタイルと、教室で教師やクラスメートとともに学ぶスタイルと、どちらが好きですか。その理由やそれぞれのメリット・デメリットについても周りの人やグループで話し合ってみましょう。

# 第11章 授業の流れを考えてみよう

## この章のポイント！

ここ数十年で外国語教育の主流は大きな変化を遂げています。とりわけ、外国語を母語に翻訳していく教え方から、コミュニケーション能力の育成を重視したアプローチへの変遷は、授業の展開や内容に大きな影響を及ぼしました。この章では、日本語の授業で教師が用いる教案について知り、皆さんが実際に授業を行う際にどんな流れで授業を組み立てればいいのか、近年注目されている二つのアプローチについて学びます。学習者の立場を想像しながら、教案作成や授業の展開を考え、授業準備を進めていきましょう。

### ☑ キーワード

授業の流れ、教案、文型ベースのアプローチ、タスクベースのアプローチ

## 1. 日本語の授業と教案作成

日本人だからといって誰もがすぐに日本語の授業をできるわけではありません。授業前には、授業の計画を立てる必要があります。授業の計画を書き出したり、打ち出したりしたものを教案(もしくは、指導案)といいます。教案は、教師が授業を進行、展開する際の目安となるだけでなく、学習者の疑問やつまづきなどの反応を予想し、それに対する応答を準備するためにも大事なものです。



### 課題 1

教案に必要な情報とは、どんな情報でしょうか。思いつく限り、書き出してみましょう。そのあと、周りの人やグループで話し合ってみましょう。

# 第12章 **〈実習①〉** 日本語授業の見学

## この章のポイント！

皆さんは日本語の授業を見たことがありますか。もし、皆さんの学んでいる大学に留学生が日本語を学ぶ別科やセンターがあれば、ぜひ、授業見学をさせてもらいましょう。ここまでで、日本語教育のいろいろな知識を学んできましたが、「百聞は一見にしかず」とはよく言ったものです。実際に授業を見学し、どのような学習者を対象に、どのような方法で教えられているのか、教室内では何が起きているのか、授業の流れはどうか、雰囲気はどうか、学習者はどこでつまづくのか、教師はどう対処するのかなど、教師側と学習者側、両方の視点で、教室のダイナミズムをぜひ感じてみてください。そして、自分が教師の立場に立った際にはどうするかを考えてみてください。この章では、授業見学の際の心得や、観察のポイント、授業観察の意義について考えていきます。

### キーワード

授業見学、授業観察、教室内インターアクション、  
スキャフォールディング

## 1. 授業見学の前に

ここからは、実際の授業現場を見ていきましょう。



### 課題 1

授業見学をするにあたり、あなたは自分の行動についてどのようなことに注意しようと思いますか。授業見学の前と授業見学中を想定して考えて、周りの人やグループで話し合ってみましょう。

まず、実際の授業見学に行く前に準備しておくべきことについて確認しておきましょう。

# 第13章 **〈実習②〉** 模擬授業の準備

## この章のポイント！

いよいよ、授業実践が近づいてきました。大学によっては実際の授業を実習として担当させてもらえる場合もあれば、留学生に実習クラスへの協力を求めて特別に実習クラスを作ることもあるでしょう。あるいは、実際の学習者を入れずに、実習生同士で模擬授業として行うかもしれません。実習で出会う学習者とは「一期一会」と心して、実習生、学習者ともに貴重な時間と機会となるよう、教案・教具・授業のシミュレーションなどできる限りの準備をしてください。

この章では、実際に日本語学習者に教えることを想定して、第11章の「授業の流れ」を参考に授業を設計し、準備を進めていきたいと思います。

### ☑ キーワード

授業の準備、教案、ロールプレイ、ロールカード、学習者の情意面

## 1. 授業はお芝居に似ている？！

皆さんはお芝居をしたり、観たりしたことがありますか。コラム1(p.19)「日本語教師に向いている人」では、「教師はある種、「演じる」という側面があります」と書かれていましたが、教師は同時に「演出家」でもあるのではないかと思います。「授業」と「お芝居」にはその準備段階から似ているところがあります。お芝居には台本があり、準備すべきプロップ(小道具)があり、本番まで練習が必要です。授業にも教科書があり、準備すべき教材や教具(スライドや配布プリント、絵カードなど)があり、最初はやはり練習やブレイクストーミングが必要です。どのような台本(教科書)にするのか、キャスト(学習者)をどのように舞台(クラス)の中で配置し、それぞれのキャラクター(個性)を活かすのか。どのタイミングでどのようなプロップ(教具)を使用

# 第14章

## 〈実習③〉

# 模擬授業の実践とふり返り

### この章のポイント！

いよいよ、模擬授業の実践です。この章では、模擬授業の実践と授業後のふり返り(リフレクション)について考えたいと思います。これまで進めてきた準備に対して「できることはやった」という自信をもって教壇に立てるといいですね。また、授業のあとにはぜひ、授業実施者と観察者と一緒  
にふり返る時間を確保しておいてください。ここでは実施者以外の観察者が観察するポイントを考えたり、協働で授業をふり返る意義や方法について学びます。

#### キーワード

模擬授業、ふり返り、協働、実施者、観察者、教師の成長

## 1. 実践に挑戦しよう

これまで学んできたこと、準備してきたことを、実践に移すときがやってきました。これまでに準備した教案の練習、シミュレーションはできましたか。配布プリント・教具・板書の準備はできましたか。準備ができれば、あとは自信を持ち、リラックスしてのぞみましょう。実習は初めてなので、うまくいかないことがあるのは当然です。失敗を学びに変えていくことが大切です。貴重な実習の機会をより良い学びの場とするために、気をつけるべき点や観察の観点を決めてみるのもいいでしょう。それと同時に、ぜひ教えることの楽しさや喜びも味わってほしいと願っています。さあ、あなたの授業という舞台の幕がいよいよ上がります。心は熱く、頭は冷静に、顔は笑顔で挑みましょう。なお、あとでふり返る際の参考として、ビデオや動画で録画しておくともいいでしょう。

# 第15章 これからの日本語教育

## この章のポイント！

日本語教育は教育の一分野です。それでは、教育とは何なのでしょう。この章では、教育についての話から始め、教育観の変遷によって生じた教師の役割の変化について述べ、これからの日本語教育について考えたいと思います。日本語教育は社会の変化によって大きな影響を受ける分野です。マニュアルや先例だけでは対応できないことにぶつかったとき、教師は何を指針にして対応すればよいのかということについても考えます。

### ☑ キーワード

日本語教育、教育観、教師の役割、支援者

## 1. 日本語教育の「教育」とは何か

「日本語教育」ということは、本書のタイトルにも入っていることばです。はじめに、「日本語教育」ということばについて考えてみたいと思います。まず、考えてみてください。皆さんが持つ、「教育」のイメージはどんなものなのでしょうか。「教育」はどこで行われていますか。対象は誰ですか。

少し抽象的になったので、具体的な話にしてみましょう。皆さんの生活の中で「教える」という活動が起こる場面を少し考えてみてください。例えば、友人に新しいアプリの使い方を教えてもらうとき、英会話学校で英語を習うとき、行われているのは「教育」でしょうか。それでは、自動車学校、テニススクール、パソコンスクールで行われているのは、「教育」でしょうか。人によって、意見が分かれるかもしれません。

もう一つの質問です。「教育」といえば、まず、皆さんも受けてきた小学校から高等学校までの学校教育がまず思い出されるかもしれません。「日本語教育」は中学校や高等学校などの「教育」とはどんな違いがありますか。その違いが生まれるのはなぜでしょうか。

▶ ㊦は、その用語に関連する用語です。合わせて確認しましょう。  
▶ [第○章]は、その用語が出てくる主な章です。

## I グループ [第8章]

学校文法(国語教育で学ぶ文法)での五段活用。I グループの動詞は例えば、「飲む」、「行く」、「買う」などである。

㊦動詞のグループ

## II グループ [第8章]

学校文法(国語教育で学ぶ文法)での上一段活用、下一段活用。II グループの動詞は例えば、「起きる」、「溶ける」、「食べる」などである。

㊦動詞のグループ

## III グループ [第8章]

学校文法(国語教育で学ぶ文法)でのサ行変格活用、カ行変格活用。III グループの動詞は例えば、「する」、「～する(例：勉強する)」、「来る」である。

㊦動詞のグループ

## IRF [第9章]

I は Initiation(先制)、R は Response(応答)、F は Feedback(フィードバック)のことを指す。教室談話の典型的な型である。

㊦教室談話、フィードバック

## JFL [第2章]

Japanese as a Foreign Language(外国語としての日本語)の略。アメリカなど海外で日本語を学ぶ場合を指す。JFL 環境では日本語に触れる機会は日本語の授業に限られることが多い。

㊦JSL

## JF 日本語教育スタンダード (Can-do リスト) [第5章]

国際交流基金がヨーロッパ言語共通参照枠(CEFR)にもとづいて作成したコースデザイン、授業設計、評価を考えるための枠組み。課題遂行能力(言語を使って課題を達成する能力)を育成することが目指されている。

## JSL [第2章]

Japanese as a Second Language(第二言語としての日本語)の略。日本で日本語を学ぶ場合を指す。日本語が学校や職場などで日常的に使用されており、生活上必須となることも多い。

㊦JFL

## あ [第10章]

### アップテイク

訂正フィードバックを受けた後に学習者が示す何らかの反応のこと。正しい形式を言い直したり、「分かりました」という応答をしたりすることのほか、頷くなどの行動もこれに含まれる。

## い [第7章]

### 易から難へ

学習項目が「易しい」ものから「難しい」ものへと段階的に並べられていること。コース全体を通して、1回ずつの授業内の構成においても見受けられることが多い。

㊦コースデザイン

## 意味交渉 [第10章]

相手の言っていることが理解できない時や不明瞭な時に、聞き返したり、確認したりして、理解できるものにするやりとりのこと。自分の発言が正しく相手に伝わっているかどうかを確認するやりとりを指すこともある。

## インターアクション [第10章][第12章]

本書では特に教師と学習者、学習者同士という二者間において目標言語で行われる情報のやりとりのことを指す。インタラクション、相互作用と呼ぶこともある。

## え [第1章]

### 英語教育

日本の小中高等学校、大学において、日本語母語話者を対象とした英語の教科教育。かつては文法教育が中心であった